

みかえり 第1号



いちじよう 一丈の堀を越えんと思わん人は、
いちじよう 一丈五尺を越えんと励むべし。
おうじよう 往生を期せん人は、
あいはげ りて相励むべきなり。
けつじよう 決定の信をと

—法然上人ご法語より—

世の中には「ほどほど」に済ませておかねばならぬこともあるし、時には「ほどほど」を越えなければならぬこともあります。概して、わが身にかかわることは「ほどほど」にし、人のために尽くすときには「ほどほど」を越さねばならないといえましよう。

念仏の信仰については「ほどほど」であってはならぬ、信丈行煙といわれるように、信仰の火が心の中で燃えれば、必ず行動となつてあらわれる、そこに安らかな幸せがあると教えられているのです。

みかえり 第2号



生^いけらば念^{ねん}仏^{ぶつ}の功^{こう}積^{じく}もり、死^しなば
浄^{じょう}土^どへ参^{まい}りなん。
とてもかくてもこの身^みには、思^{おも}い
煩^{わづ}らうことぞなきと思^{おも}いぬれば、
死^し生^{しょう}ともに煩^{わづ}らいなし。

―法然上人ご法語より―

高見順の詩に、「帰れるから
旅は楽しい。旅のさびしさを楽
しめるのも、わが家にいつかは
戻れるからである」と、帰るわ
が家のある歡^{かん}こびをうたつたも
のがあります。いずれは浄土に
帰るわが身であると思^{おも}い定めれ
ば、死^し生^{しょう}ともに何の煩^{わづ}らいわしい
ことがあるか、と法然上人はい
われるのです。わが親も先祖も
みんな帰っていった浄土を、わ
がふるさと思^{おも}い定めて、帰る
べきところへ「いざ帰らん」と
の決意が、「南無」の称名にほ
かならないのです。

みかえり 第3号



念仏ねんぶつする者ものをば弥陀みだの光明こうみょうをはな
ちてつねにてらして捨て給たまわず。

——法然上人御法語より——

母親は自分の子どもに、こうしてはい
けない、このようにするのですよと教え
る。またあぶない時には自分が飛んでい
って注意をする。例えば、自分の子ども
が井戸のところで遊んでおり、そのうち
に井戸の中をのぞいたならば、その時母
親は「あぶないからやめなさい」と言葉
だけで注意する人はいない。「あぶない
!!」という大声と同時に台所にいても、
くつもはかず、裸足のままでかけ出して
その子を抱きかかえるであろう。

阿弥陀様の慈悲もこのようなものであ
ると言えましょう。ただ、この例によつ
てアミダ様と母親とを対応してみるとき
仏様の方は母親とちがつて自分の子だけ
でなく、全ての人をてらしてくださると
いうことです。



仏は悪人^{あくにん}をすて給^{たま}はねども、
 このみて悪^{あく}をつくる事^{こと}、
 これ仏^{ほとけ}の弟子^{でし}にはあらず。

——法然上人御法語より——

「悪い事など、生れてから一度も
 したことがない」と言いきれぬ人が、
 はたしてあるでしょうか？ だれも
 が、好むと好まざるにかかわらず、
 悪事を働いているものです。私たち
 が生きていること、多くの生物の種
 子（米や麦がそうです）を食べ、魚
 や家畜の肉を喰うこと自体、すでに
 悪です。悪を働かざるをえない罪深
 い自分に気づき、そんな愚かな自分
 をさえ、お救い下さることへの感謝
 の念がお念仏となつて出るのではな
 いでしょうか。

「悪人でも救つてもらえる」からと、
 好んで悪事を働くようでは、まだほ
 んとうに仏さまの心にふれていない
 ことになります。



十六羅漢図

受けがたき人身を受けて、遇いがたき本願に
 遇いて、発しがたき道心を発して、離れがた
 き輪廻の里を離れて、生まれがたき浄土に往
 生せんこと、悦の中の悦なり。

——法然上人御法語より——

私たちは、今わが身が人間として生きていることに、不思議を感じることがありませんか。どうして犬や猫でなく、人間なのでしょう。考えてみれば、これほど不思議なことはないでしょう。ところが、えてして私たちはそれを当然のことと受けとつていますね。でもそうでしょうか。どこか虫がよく

くはありませんか。

仏教の説くところは、

決して難しいことではありません。今の場合、当然なら当然でよいのです。ただし、そういうからには何事においても、それで通せと説くのです。その時否が応でも私たちに知らされるのが、し難い、ということであり、真の悦の自覚であるのです。 総本山 永観堂禅林寺